

Disneyが生んだ新しい「ラプンツェル」の世界

10L036 宮路 真実

このレポートではディズニーの『塔の上のラプンツェル』（*Tangled* 2010年）と原作であるグリム童話の「ラプンツェル（髪長姫）」との比較を試み、ディズニーアニメーションの特徴から、グリム童話であるラプンツェルをディズニーがどのように変容させているのかについて考察する。

映画の概要

【映画情報】

原題 *Tangled* 邦題 『塔の上のラプンツェル』

監督 Nathan Greno（ネイサン・グレノ）

Byron Howard（バイロン・ハワード）

製作 Roy Conli（ロイ・コンリー）

製作総指揮者 John Lasseter（ジョン・ラセター）

Glen Keane（グレン・キーン）

脚本 Dan Fogelman（ダン・フォーゲルマン）

音楽 Alan Menken（アラン・メンケン）

アニメーション・スーパーバイザー Glen Keane（グレン・キーン）

John Kahrs（ジョン・カーズ）

Clay Kaytis（クレイ・ケイティス）

製作会社 Walt Disney Animation Studio

公開 アメリカ2010年11月24日

日本 2011年3月12日

ジャンル アニメーション

【原作】

「ラプンツェル」（髪長姫）

グリム童話（*Die Kinder und Hausmärchen*）に収録されている作品（KHM 12）

【映画のあらすじ】

深い森に囲まれた高い塔に住むラプンツェル。彼女の驚くほど長い髪は歌うと光る魔法の髪。ケガや病気を癒す力がある。ラプンツェルと住む母グートルはその髪力の為彼女をさらい自分の子として育ててきた。18年間塔の外に出たことがなかった彼女の楽しみは、毎年自分の誕生日になると遠くの空に現れる灯りを見ること。無数の灯りの正体が知りたくてたまらなかった。

18歳の誕生日前日、ラプンツェルは「灯りを見に行きたい」と母に告げるが今までより厳しく禁じられてしまう。ひどく落ち込むラプンツェルの前に現れたのは、お尋ね者の大泥棒フリン。彼は追手を逃れ

て塔に侵入し、悪者だと思ったラプンツェルは彼を捕えてしまう。そして彼が盗んだティアラを取り上げ、交換条件として灯りの場所まで案内させることにした。

初めて塔の外に出たラプンツェルは外の世界に感動し、そしてフリンと旅を続けているうちにラプンツェルの心に淡い恋が芽生えていく。困難を乗り越えながらも本当の親の元へ帰り、フリンと幸せに暮らした。

1. グリム童話とは

グリム童話とはヤーコプ・ルートヴィヒ・カール・グリムとヴィルヘルム・カール・グリムからなるグリム兄弟によって^{へんさん}編纂された童話集である。グリム兄弟がドイツの町や村に伝わる童話を集めて編集したもので、伝承童話なので特定の作者は不在である。

『グリム童話集』は、ドイツ語圏では聖書に次ぐベストセラーであり、ドイツ語圏に限らず、童話集としては世界中でいちばん親しまれているものである。童話集の正式なタイトルは『子どもと家庭の童話(メルヘン)』*Kinder-und Hausmärchen*である。ドイツ語で*Märchen*、英語では*Fairy Tales*と呼ばれるおとぎ話である。「ラプンツェル」の他に主な作品として「白雪姫」、「眠り姫」、「ヘンゼルとグレーテル」、「シンデレラ(灰かぶり)」などがある。しかし私たちが知っている話は子供向けに書き換えられたもの、絵本やディズニーが映画化しているものがほとんどである。

グリム童話集が初めて世に出たのは1812年である。その後6回書き換えられ、1857年の第7版では全200話収録されている。書き換えの例としては、まず個々の話を子ども向けに書き換えた。書き換えた理由は、はじめはメルヘンの研究書として出版したが、版を重ねるにつれ、ヴィルヘルムは子どもの読者を意識するようになったからだ。性的な事柄をほのめかす表現など子どもの目にふれさせたくないというグリム兄弟が考えたものを削除した。「ラプンツェル」もその一つであり、性交渉や妊娠の部分はあとで取り除かれた。しかし暴力や残虐性のある表現はそのまま残され、版を重ねるごとに酷くなることもあった。

小さいころに子供向けの絵本やディズニー作品でグリム童話を知り、大人になって「本当は恐ろしい」グリム童話を知り、楽しむこともできる。よってグリム童話は子供から大人まであらゆる世代の人が楽しめる作品である。また個々の物語に特定の作者はいないが、グリム兄弟によって所々書き換えられているため、グリム兄弟の創作作品でもあるといえるだろう。

2. ディズニー長編アニメーション第50作記念作品

ディズニー長編カラーアニメーションとして第1作目となったのは1937年の『白雪姫』である。この1作でハリウッドの常識を覆し、長編アニメーションというジャンルを確立した。『塔の上のラプンツェル』は、その『白雪姫』から数えて通算50作品目にあたる。

これまで数多くの童話を良質なアニメーション作品に作り変えてきたディズニーが、記念すべき50作目にしたのは、『白雪姫』と同じグリム童話である『ラプンツェル(髪長姫)』。ウォルト・ディズニー自身も、1940年代に映画化の企画を立てていた。監督のNathan GrenoとByron Howardは「ラプンツェルは何者なのか」、「どうしたら彼女を早く塔から出せるだろうか」という疑問からアイデアを膨らませ、原作とは異なるヒロイン像を作り上げた。

製作チームがこの作品を作る上で試みたのは、伝統と新しさの融合である。ディズニーの伝統的なストーリー・テリングに現代的な感覚をプラスし、手書きアニメーションで作上げてきた伝統を3DCGのスタイルに合う新しい方法で表現することだ。そして完成したのはCGアニメーションでありながら、往年のディズニーの名作を思わせるオーガニックで芸術性の高い作品。手書きアニメーションのオーガニックな感触を最先端のCGで表現したことにより、CGでありながら繊細で温かみがあり、キャラク

ターの息遣いや微妙な心の機微までもが伝わってくる映像である。映像の美しさは特にこれまでのCGのレベルをはるかに超え、繊細で生き生きしたキャラクターの表情や動きが伝わってくる。

3. ディズニーアニメーションの特徴と原作との違い

ディズニーアニメーションの特徴として挙げられるのは、ディズニーならではのユニークなキャラクター、ストーリーの合間に歌と踊りが入るミュージカル仕立ての構成、リアルなキャラクターの動きなど映像の美しさと3DCGの技術、「夢」を意識したストーリーでハッピーエンドなどがある。

次にキャラクター、音楽、「夢」というテーマ、3DCGの3つを挙げて述べる。

【キャラクター】

以下の表は原作とディズニーのキャラクターの違いを簡単に表したものである。

キャラクター比較	原作	ディズニー
Rapunzel	何の身分もない普通の娘	王国で生まれたお姫様（歌うと光る魔法の髪を持つ）
Flynn Rider	王子	お尋ね者の大泥棒
Mother Gothel	魔女（ラプンツェルの父に庭の野菜を盗みに入られる）	ラプンツェルを王国からさらい、ラプンツェルの髪の力を自分の為に使う悪役
Rapunzel's Father & Mother	魔女の家の隣に住む夫婦（裕福でない。魔女の庭にあるラプンツェル〔野菜〕と引き換えに、生まれた娘を魔女に引き渡す）	国王と王妃（ゴートルに娘ラプンツェルをさらわれる）
Pascal&Maximus	×	登場

ここで面白い点は、まず原作とディズニーではラプンツェルとフリン（王子）の立場が逆転していることである。つまりディズニープリンセスとしてラプンツェルを描いている。プリンセスではあるが「身近で共感できるようなキャラクターにしたかった」と監督のByron Howardは言っている。そしてフリンのキャラクターについては大幅に原作と違う。原作では名前もない王子がディズニーによって、プレイボーイで魅力的な大泥棒のフリン・ライダーに生まれ変わっている。彼は、限られた世界しか知らないラプンツェルが外に出るのを手助けする役割を果たしている。ただ馬に乗ってやってくるプリンスでは、今までと変わらないが、泥棒であればプリンスとかけ離れているし、プレイボーイ的な性格もキャラクターの魅力である。

ゴートルは原作でラプンツェルの父に畑に野菜を盗みに入られ、その代償として娘をもらい受ける約束をするが、映画では逆に娘をさらい、自分の美貌の為にラプンツェルの魔法の髪を使う。つまりディズニーに必ずいる悪役になっている。パスカルやマキシマスといった動物はディズニーのオリジナルで、表情がとても豊かな動物キャラクターはディズニーらしい特徴である。

【音楽と夢】

ディズニー映画での一番の大きな特徴はストーリーの合間に歌と踊りが入るミュージカル仕立ての構成である。

『美女と野獣』、『アラジン』などで8度アカデミー賞を受賞した作曲家のAlan Menkenが作曲している。『塔の上のラプンツェル』も歌や踊りのシーンはとても多い。ディズニープリンセスの映画には特に多くの歌が使われており、“A Whole New World”や“Under the Sea”など名曲も数多くある。

ディズニー映画での歌はセリフのように歌っていたり、キャラクターの状況やそのときの感情をストレートに表しているものが多いので、キャラクターに感情移入できるし、物語がわかりやすい。そして観客はそのキャラクターを好きになり応援する。「歌はキャラクターの内側から流れ出てくる。キャラクターやキャラクターの旅に寄り添った歌だからこそ、ハートに響く」とAlan Menkenは言っている。

ディズニーでは「夢」をテーマにしていることが多く、ディズニーランドなどのショーでも必ず「夢」というキーワードが出てくる。ディズニー映画では主人公のキャラクターに「夢」を持たせ、その「夢」を叶えるための物語を作っている。「夢」を歌で表現しているシーンも多くある。ラプンツェルでも酒場の荒くれ者たちのシーンではラプンツェルやフリン、酒場の荒くれ者たちが自分の「夢」について歌っている。

【3DCG】

ディズニーの伝統的なストーリー・テリングに現代的な感覚をプラスし、ディズニーが手書きアニメーションで作上げてきた伝統を3DCGのスタイルに合う新しい方法で表現している。それにより繊細で生き生きしたキャラクターの表情や動きを表現している。

今作が3Dに最適な理由のひとつは、ラプンツェルの髪だ。製作チームが質感や動きにとことんこだわった美しい髪を、より効果的に表現できるからだ。3Dの映像によって、分かれた数本の毛束や髪のボリュームまでを感じとることができる。特にラプンツェルが髪を塔の下へ降ろすシーンは、2人の監督がアングルに工夫を凝らしている。ラプンツェルの髪をいかに魅力的に表現するか、Glen Keaneがこだわったのはボリューム感があって優雅なカーブを描くナチュラルな髪。それをCGで表現するため、エキスパートたちによるテクニカルチームが編成され、新たに開発されたダイナミック・ワイヤーというソフトウェアを使って、シミュレーションが繰り返された。ラプンツェルが髪をつかんで投げたり、ロープのように使ったりする複雑な場面では、アニメーターが髪の構造を模した147本の長いチューブを手動で動かし、それを最終的に14万本の髪の毛に変えていくという、時間と手間のかかる作業を要したという。

さらに芸術性に磨きをかけるために、シャンプーのコマーシャルを見たり、6フィート（約1.8メートル）の髪を持つモデルを観察したりして研究を重ね、あの魅惑的な髪が作られていった。

髪は女性にとって大切なものとされ、美のシンボルなだけあり、これだけ強調されるととても印象に残る。ラプンツェルと言えば長い髪というように。最後に髪を切ってしまうシーンも衝撃的である。女性が髪を切るときは何かを決断するときとして描かれることが多いが、ここでもドラマティックに扱われている。ラプンツェルの髪を切ってしまうのはフリンだが、ラプンツェルにはもう魔法の髪は必要ないと判断したから切ったのだろう。彼女が自由になれないのはこの魔法の髪のせいで、これがなければ彼女は自由になれる。自分は助からなくてもラプンツェルに幸せになってほしいというフリンの願いから髪を切ったのだろう。

空飛ぶランタンのシーンでは1組14個のランタンからなるグループに分けて、それぞれ違った色や形にしている。そのうえで各ランタンに1万マイクロポイントの光を描き、さらにそれを複製させて、クラ

イマックス・シーンでは最高で4万6千個のランタンが登場している。観客はこの光景を間近で見ることができたラプンツェルの喜びを、リアルに共有することができ、自分がランタンの光に囲まれているような気分を味わうことができる。

4. 結論

ラプンツェルの製作チームがこの作品を作る上で試みたのは、伝統と新しさの融合である。50作目の題材に1作目と同じく原作がグリム童話であるラプンツェルを選んだ。ディズニーは今までに数々の童話を映画化してきているが、今までのようにただ楽しくハッピーエンドの物語やプリンセスの物語にするのではなく、誰も想像できないようなラプンツェルの物語を作り上げた。

キャラクターの設定は原作とは大幅に変わり、特にフリンというキャラクターは今まで「シンデレラ」「眠れる森の美女」などのディズニープリンセスの物語にいた王子とは違いとてもユニークである。「アラジン」のアラジンには少し似ている部分がある。ラプンツェルに「塔の外に出たい」という「夢」を持たせ、彼女が塔を飛び出すことで、ただお城で待っているプリンセスとは違うコミカルな冒険物語に仕上げた。

ディズニー映画で一番大きな特徴である音楽。この映画もミュージカル仕立ての構成で作られた。そして新たに3DCGの技術をプラスしたことにより、より迫力があり美しい映像に仕上がった。

このように歌や「夢」など今までのディズニーの特徴を生かしつつ、キャラクター作りや3DCGなどの新しいアレンジが施されたことにより、グリム童話のラプンツェルとは違った新しいラプンツェルの物語が生まれたのである。

参考文献

- 小野俊太郎 『映画でレポート・卒論ライティング術』 東京：松柏社、2011年。
柴田めぐみ（アートディレクション）宮内晃弘（東宝アド）編集
映画『塔の上のラプンツェル』パンフレット 東京：(株)東和プロモーション2011年
映画「塔の上のラプンツェル」オフィシャルサイト
<http://www.disney.co.jp/movies/tounoue/index.html> (11/12/14)
鈴木晶 『グリム童話/メルヘンの深層』講談社現代新書、1991年。
全文<http://www.shosbar.com/grimm/grimm0.html> (12/1/21)

The Tale of New Rapunzel made by Disney:
How Disney Made the Old Fairy Tale New in *Tangled* (2011)

Abstract: This film is based on one of the Grimms' Fairy Tales, "Rapunzel". Disney changed it into a new adventure story. It is not a traditional story to set a confined princess free any more. *Tangled* is released in U.S. on November 24th, 2010, in Japan on March 11th, 2011.

Nathan Greno and Byron Howard directed the film. The story is as follows. There is an 18-year old girl who has magical long hair. Her name is Rapunzel. She lives in the tower for 18 years. For her 18th birthday present, she wishes to go out of the tower for the first time. Her dream is to see those lanterns which fly on her birthday every year. She meets Flynn Rider, who gives her a chance to jump out of the tower. This is the beginning of her adventures. This essay is to show how Disney made the old fairy tale new. First, to compare with the film, Grimms' version will be shown. Second, some of the new elements such as characterization, music, and new technology of animation will be mentioned. Given the arrangement by Disney, the tale of new Rapunzel was produced. The old fairy story was successfully revived by Disney's magic.

(担当教員 杉村使乃)